

## リンゴ「ぐんま名月」の省力的摘果技術

### 研究のねらい

リンゴ栽培では、頂芽の中心果を残しながら頂芽の側果とえき芽の果実をすべてつみ取る「摘果」が行われます(写真1)。しかし「摘果」は、ハサミを使った手作業で行なわれるため、多くの労力が必要となり、その省力化は重要な課題となっています。また、安定した摘果効果を有する植物生育調節剤として現在使用されているミクロデナポン水和剤85は、処理効果が品種によって異なります。

そこで、結実が良好なため、摘果に多くの労力を要する群馬県育成品種「ぐんま名月」(写真2)の効果的な薬剤摘果法を検討しました。

### 技術の特徴

- 1 ミクロデナポン水和剤85の1200倍液に展着剤を加用した薬液を十分量(10aあたり、約350ℓ)散布します。展着剤はアプローチBIを使用し、散布液100ℓあたり300mlを加用します。
- 2 目通りの高さで、「頂芽」の中心果の果実横径が約12~14mm、「えき芽」の中心果の果実横径が約10~13mm程度に達した時期(満開3週間後頃)に散布すると、摘果に手間がかかる「えき芽」の果実が適度に落果します(図)。



写真1 リンゴ頂芽の中心果と側果

- 3 処理後14日程度経過した頃に薬剤による生理落果が終了します。
- 4 果実横径が14mmを越えた場合には、薬剤への感受性が鈍くなり、落果しにくくなる傾向があるので、散布時期を逸しないように注意します。
- 5 薬剤の効果による落果を確認した後、仕上げ摘果を実施します。



写真2 観光リンゴ園で好評な「ぐんま名月」

### 今後の取り組み

県内のリンゴ生産者に、「ぐんま名月」の薬剤摘果技術を活用してもらい、省力化、低コスト化を図ります。またこの取り組みにより、消費者に人気のある「ぐんま名月」が増産され、観光リンゴ園経営の安定化に役立ちます。(執筆者：堀込 充)

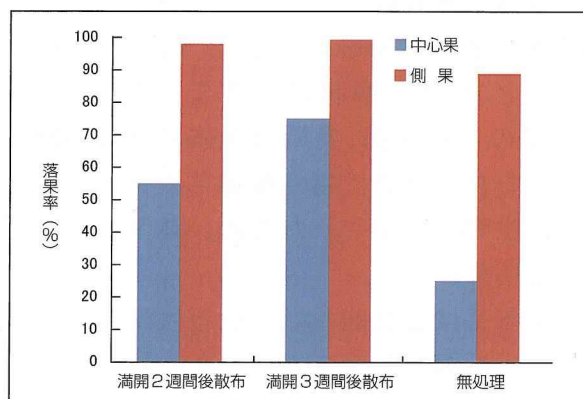


図 ミクロデナポン水和剤85を散布した「ぐんま名月」えき芽果実の落果率(平21)